

The Professor と Villette

白 井 義 昭

『教授』(The Professor)の出版は1856年であり、これに対し『ヴィレット』(Villette)の出版は1853年である。だが周知のごとく、『教授』の執筆は1846年にされており、『ヴィレット』より7年も前に生み出されている。ところで、マーガレット・レーン (Margaret Lane)は『教授』は『ヴィレット』のリハーサルだ¹、と言っている。彼女の言う通りなのであろうか。もしそうならば、いかなる観点から、そう言えるのか。あるいは、逆にリハーサルではないのだろうか。問題は複雑であり、解答を出すのは難しい。

私は『教授』が「出エジプト記」と極似していることを論じたことがある²。その内容がかいつまむと次のようになる。「出エジプト記」(これには「創世記」の末尾部分も含む)には、およそ次の六段階がある。つまり、

- (1) 兄弟によるヨセフに対する虐待
- (2) ヨセフのエジプト行き
- (3) 仕えている主人の妻による深情け
- (4) 彼と子孫の、エジプトにおける繁栄
- (5) エジプト人によるイスラエル人迫害
- (6) 出エジプト、それにカナン到着

である。『教授』は一部に順序の変更はあるものの、この六段階をほぼ踏襲している、というのが論旨であった。『ヴィレット』においても、これらの段階が踏襲されているように見える³。しかし、各段階の区別が明瞭でない点や、内容上大分異なる点があり、『教授』と『ヴィレット』は別作品という印象も受ける⁴。

小論では、この両作品の類似点と相違点を指摘し、果してレーンの言うように、リハーサルと言えるかどうかを考慮してみたい。このような考察により、さらに新しい研究の展望が開けるのなら幸いである。

I

まず、第一の段階であるが、『教授』においては、ウィリアム・クリムズワース (William Crimsworth)なる主人公が、実兄のエドワード (Edward)らに冷遇される。他方、『ヴィレット』では主人公は女性になっている。ヒロインのルーシー・スノー (Lucy Snowe)はブレトン (Bretton)家の世話になっているが、ウィリアムのように周囲から冷遇されることはなく“One child in a household of grown people is usually made very much of, and in a quiet way I was a good deal taken notice of by Mrs. Bretton”⁵からも知れるように、暖かく遇される。ウィリアムもルーシーも、共に孤児である点では似ているのであるが、小説

の冒頭における二人の状況は以上のように、明暗のコントラストをなし、甚しく異っている。

第二の段階に行こう。この段階では、ウィリアムもルーシーも共にイギリスを離れ、ブリュッセルに発つ。ウィリアムはハンズデン (Hunsden) の、ルーシーはファンショアー (Fanshawe) の勧めによって、この行動をおこす。助言者の二人は、主人公達の友人という立場では共通しているが、違う点もある。それは、ハンズデンが終始ウィリアムの親友であるのに対し、ファンショアーはルーシーが淡い恋心を抱くジョン (John) の恋仇き、とまではいかなくとも、彼の心を引きつける女性として再登場してくるからである。

第二の段階において、さらに再作品に共通したものとして、主人公達のブリュッセルにおける就職の状況があげられるだろう。まず、ウィリアムについて言えば、彼は学園を営んでいるペレ氏 (Monsieur Pelet) に雇われる。同じく、『ヴィレット』のルーシーもベック夫人 (Beck) に雇われる。しかも二人とも英語の教師としてである。また、専任に勤める勤務先の校長が、主人公達と同性であるのも共通している。

さらに、もう一つ共通している点を指摘する必要がある。それはウィリアムとルーシーが、突然持たされた授業において、同じような教授法を取ったということである。彼らが授業を開始しようとする時、生徒達はこの新参の教師をからかい、困らせようとする。ところが、『教授』においては、ウィリアムが、一番いたずらな女生徒の書取りの用紙を四つ裂きにし、相手の度胆を抜く。この結果、教室の雰囲気は “the conceited coquetry and futile flirtation of the first bench were exchanged for a taciturn sullenness, much more convenient to me, and the rest of my lesson passed without interruption” (p. 88) となる。

『ヴィレット』においてはどうかというと、態度の良くない最年長の女生徒の作文をルーシーは大声で読み、二つに裂いてしまう。それでもルーシーに従おうとしないドロレス (Dolores) という生徒がいたので、ルーシーは教室に隣接している書籍置場に鍵をかけ、そこに彼女を閉じ込めてしまう。これで、教室内は正常化され、

when I had gravely and tranquilly returned to the estrade, courteously requested silence, and commenced a dictation as if nothing at all had happened—the pens travelled peacefully over the pages, and the remainder of the lesson passed in order and industry. (p. 92)

となった。このように二人とも、同じく強行手段を用い、機先を制したのである。

以上から知れるごとく、第一段階と第二段階における『教授』と『ヴィレット』は大変似ていると言えるが、第三段階以降も果して類似性が見られるのか、あるいは第一段階における明暗のコントラストが尾を引き、再作品の類似性を破ることになるのであろうか。こうした点に注目しながら、次の段階を比較検討することにした。

II

ジェーン・オースティン (Jane Austen) の有名な “It is a truth universally acknowledged that a single man in possession of a good fortune must be in want of a wife” ではない

が、ウィリアムもルーシーも教職に就き、生活が安定して来ると恋をし始める。『教授』から見ることにしよう。ウィリアムはベレの管理する学校の外に、それに隣接している女学校にも非常勤講師として出講することになるが、その校長ロイター女史 (Reuter) に恋をする。また、彼女も彼にその気があるような素振りを見せる。だが、ロイター女史は、かねてからベレ氏と婚約しており、ウィリアムの心を弄んでいることが判明し、ウィリアムは失恋の痛手を受ける。「出エジプト記」において、ヨセフはポテパルの妻の裏切りであったが、ウィリアムもロイターに裏切られてしまうのであった。

次いで、この筋と対応する『ヴィレット』の部分に触れる必要があるわけだが、その前に『教授』の次の段階、つまり第四段階目を見ることにする。というのは、こうしないと『ヴィレット』と比較するにあたり、説明上混乱すると思われるからである。角度を変えて言うなら、この辺より『教授』と『ヴィレット』は似而非なるものになってきていると言えようか。

『教授』における第四の段階は迫害がテーマとなっている。ロイターとの恋を失った後、ウィリアムはロイターの経営する学校の刺繍の教師でもあり、彼の英語のクラスにも生徒として出席していたフランシス・アンリ (Frances Evans Henri) に好意を持つ。ところが、彼女への愛が強まるにつれ、ロイター女史の嫉妬に責められる。ロイター女史はベレと婚約しており、ウィリアムと結婚する意志が無いのであるから、ウィリアムとフランシスの仲を暖かく見守ってやれば良い筈であるのに、ロイターは二人の仲を裂こうと計り、そのためフランシスを解雇する。フランシスはウィリアムに行先を知らせず失踪する。他方、ウィリアムも、ロイターのフランシスに対する処置に反発し、ベレとロイターの二校長に辞職願いを提出し、フランシスの後を追う。

以上のような迫害を扱っているこの第四段階には、さらにウィリアムがフランシスの後を追いかける姿が付け加えられている。しかも、彼らの姿には、約束の地カナンを目指し、エジプトから遁走するイスラエル人の姿が重ねられている。これを若干説明したい。ウィリアムはフランシスを探しに行くにつれ、プロテスタントの墓地に辿り着き、さらにその奥まった所に隠れているフランシスを見つける。次いで彼女の部屋を訪れ、そこで百年前のイギリスにいるような気分を味わうのである。このことは、たとえ異国の地ではあっても、その一角にカナンにも比すべき所に到着したことを意味すると解釈してよいだろう。こうした経過の後二人は結ばれるのであった。『教授』はこれまでとして、それでは『教授』の第三と第四に相当する部分は『ヴィレット』ではどのようにになっているのであろうか。

『ヴィレット』で恋愛が姿を現わしてくるのは、『教授』においてよりも、かなり後になってからである。つまり、ウィリアムがプロテスタントの墓地でフランシスを見つける場面が『教授』にあったが、それと似かよった事件が『ヴィレット』にも起こり、その後になって漸く主人公ルーシーにも恋心が意識されるようになっていく。要するに『ヴィレット』では、『教授』におけるとは逆に、まず「迫害」らしきものが現われ、次いで第四段階目として女による裏切りに相当するものが出現する形を取っている。それでは、まず第三段階目から見て行くことにしよう。15章で展開されている。

ルーシーは異国ブリュッセルのヴィレットに馴染めず、友人もなく半ばノイローゼ症状を

呈するようになる。夏休みになり、一人だけになると神経症は悪化の一途をたどる。そうしたある夕方、ルーシーは孤独に耐え切れず、ぶらぶらと外へ歩き始め、カトリック教会に入り、告白を牧師に聞いてもらおうとする。この場面で興味を引かれるのは、モチーフとしては『教授』の第四段階に見られた、プロテスタント墓地での遁走のそれと似てはいるが、その実、結論的には全く正反対になっているという事実である。繰り返しになるが、ウィリアムは自分の信じるプロテスタントの墓地に自然と進んで行く。だが、ルーシーは違う。彼女はカトリックの教会に来るのである。またウィリアムは迫害から逃れ、一步一步と明るい約束の地と向ったが、アンリは反対に一步一步と暗い方面に進んで行く。これを本文に沿って見て行こう。

彼女は歩いて行くにつれ、全然知らない街の中へと入ってしまう (“I had become involved in a part of the city with which I was not familiar”) (p. 191)。さらには、迷路に入り込み (“I got immeshed in a network of turns unknown”) (p. 192)、しまいには道に迷ってしまう (“I was lost”) (ibid.)。しかも、道路には誰一人として頼りになる人はいない。最後には、大邸宅の門前で、ルーシーは気を失ってしまう (“Instead of sinking on the steps as I intended, I seemed to pitch headlong down an abyss. I remember no more”) (ibid.)。『教授』では、主人公ウィリアムはイギリス人を父に持つ、つまりイギリス人の血を半分持つフランスに会い、かつ彼女の部屋に招かれ、イギリスらしい雰囲気を楽しむというのに、『ヴィレット』においては、何という違いが見られることであろうか。

ここで、両作品の冒頭に目を転じてみるのも一興であろう。『教授』ではウィリアムは肉親から疎外されていた。反対に『ヴィレット』のルーシーは、たとえ名付け親でも、頼れるブレトン夫人の暖かい手に抱かれていた。ところが、今や両者の立場は逆転し、ウィリアムの方が暖かい愛情に包まれ、しかも故郷にいるがごとき感じを味わっているのである。全く二人の立場は逆転している。

次に『ヴィレット』の第四段階へ入ってみたい。「出エジプト記」のポテパルの妻の件に相当するものが、『教授』ではロイターとウィリアムの恋愛であったが、『ヴィレット』では少し形を変え、ルーシーとジョンという組み合わせ、しかも迷惑をおよぼす役が「出エジプト記」と『教授』では女性であったのが、ここでは男性のジョン、という形となって出ている。

カトリックの教会を出た後、雨の中で倒れていたルーシーは、ジョン医師に救われる。彼は彼女を自分の家に連れて行き、母親つまり、冒頭でルーシーの世話をしたブレトン夫人に看護させる。こうして、ルーシーはこの小説の第一章の時と同じ環境に戻り、再び心のこもった暖かい生活を送る⁶。こうした所は『教授』においてウィリアムがフランスの部屋に招かれたのと似ていなくもない。しかし、『教授』では漸次幸福へと向っているのに対し、『ヴィレット』は浮き沈みがあり、しかもジョンとの関係が、これから考察するようにハッピー・エンドになっていないことに目を向けるべきであろう。

ルーシーは、ブレトン夫人の暖かい看護を受けているうちに、ジョンと親しさを増して行く。ジョンはファンションが好きであったのだが、ある音楽コンサートが催された時に彼女がジョンの母を軽視したため、彼女が嫌いになり、“For this reason Ginevra is neither a pure angel, nor a pure-minded woman” (p. 258) であるとルーシーに打ち明けるのであ

た。ルーシーは授業が開始されてもおなブレトン夫人の世話になっていた。しかし、体が完全に回復すると、学校に戻る。戻ってからの彼女にとり、ジョンからの便りが唯一の心の慰めであった。また、ジネヴラ・ファンショーを母親との関連で疎んじているジョンは、ルーシーに心のこもった手紙を書く。そんな彼の手紙を一人で屋根裏部屋で読んでいたところ、尼らしき者が出現し、ルーシーは驚く。ベックの学校には以前修道院があって、道からそれたために生き埋めにされた尼僧が出没するという噂があり、ルーシーはそうした幽霊だと考え、震える。そんな彼女をジョンは優しく慰め、もし幽霊が出たなら “Give her my compliments, if she does—Dr. John’s compliments—and entreat her to have the goodness to wait a visit from him” (p. 298), のようにしなさい、と冗談を言ってルーシーの心を和ませてくれる。

ところが、ある日ルーシーとジョンが観劇に出かけたところ、上演中に火災が発生し、場内は大混乱となる。このためにある女性が負傷することとなった。この女性は父親と一緒にいたが、ジョンは医者としての立場から、この負傷者の手当をし、念のため彼女達の自宅まで送り、さらに必要な治療を施した。しかし、話を交していくうちに、この親子はボンピエール (Bassompierre) 父娘で、この女性がかつてブレトン夫人の許に一時預けられ、ルーシーともしばらくの間一緒だったあのポーリーナ (Paulina) であると判明する。これ以後ジョンの関心は、ルーシーからポーリーナに転じて行く。ルーシーはこれを感じ取り、自分から身を引こうとし、そのために “A Burial” と題された26章で、彼女はジョンからの手紙を梨の木の下に埋める。彼女の意図は、

But I was not only going to hide a treasure—I meant also to bury a grief. That grief over which I had lately been weeping, as I wrapped it in its winding-sheet, must be interred. (p. 353)

とあるごとく、失恋の悲しみを埋めることであった。

ヨセフはポテパルの妻の奸計に、『教授』ではウィリアムがロイターの手にかかり、それぞれ辛い思いをした。しかし、『ヴィレット』においては、加害者、被害者という人物は登場しない。またジョンがルーシーに好きと明言したこともなければ、二人に恋の約束があったわけでもない。ルーシーがジョンからの手紙を埋めるのは彼女の思いすごしと取られても仕方なからう。結果的に見れば、ルーシーがジョンの愛を失ったのであり、この意味でのこの場面は「出エジプト記」や『教授』の当該場面と似てはいても、ルーシーの、失恋に至る過程が『教授』とは全然異っているのであるから、同質に取り扱うことは無理ではあるまいか。

III

『教授』では第四番目の迫害の後にウィリアムとフランシスの再会があり、続いて彼らの愛の深化、そして結婚が続いている。結婚後二人は手に手を取り合い、学校の経営にあたり、成功を治める。これが第五段階目であるが、『ヴィレット』の方はどうであろうか。ジョン

の愛を失ったルーシーは、間もなくポール・エマニュエル (Paul Emanuel) へと心に向けて行く。彼はベック夫人の親戚で、隣の男子校の教師である。この所は、ロイターとの恋に破れたウィリアムがフランシスに近づいていく箇所と極めて似ている。

ルーシーは、ポールの指導を受け、勉強を続ける。33章になると、5月のうららかな春の日に、遠足に出た折、ポールより愛の告白らしきものを感じ取る。しかし、『教授』において、ウィリアムがロイターの干渉を受け、フランシス・アンリと別れさせられ、職を失ったように、ポールもベック夫人に嫉妬され、彼女の指図でインドの方面に、一種の島流しにされようとする。

だが、ポールはイギリスを出港する間際になって、ルーシーと会い、自分で借りた家へ彼女を案内し、そこで『教授』のウィリアムとフランシスがしたと同じく、ルーシーに生徒を募り、学園を創設させる。この事業は順調に発展して行く。ここに『教授』の第五番目の段階で描かれていたと同じ「繁栄」が描かれていると見て良いかも知れない。しかし、たとえばルーシーの事業が伸展したとしても、『教授』と『ヴィレット』には大きな質的相違があると言わなければなるまい。なぜならば、フランシスとウィリアムの場合、彼らは二人で共同して学校の経営に従事するのに対し、ルーシーの場合は、遠く外国へ行ってしまう男性を待つ、孤独な女性なのである。彼女の心境がどうであったかは、まだポールが出帆する前に、思い違いからもうポールは発ってしまったと考えていた時の、

What wonder that the second evening found me like the first—untamed, tortured, again pacing a solitary room in an unalterable passion of silent desolation, (p. 538)

から窺える。

ところで、今取り上げている、'Cloud' と題された、この第3巻の38章には、第1巻の最終章である15章と連結しているモチーフが描かれてある。換言するならば、『教授』で見られたウィリアムとフランシスによるプロテスタントの墓地への「遁走」のモチーフが再度用いられてある。15章と『教授』との関連については既に触れたが、あの章でこのモチーフが完結しているのではなく、この第3巻の38章という『ヴィレット』の最終部分においても綿綿とつながっているのである。このように、ある段階が完結しないで、後まで尾を引いていく、まさしくこうした手法に『ヴィレット』と『教授』との相違点があると言えるのではないだろうか。

一般論はこのくらいとして、以下において、しばらくその「遁走」のモチーフを追ってみたい。ポールは出帆したと思い込んで、精神に幾分か変調をきたしているルーシーは、ベック夫人が召使いに持って来させた飲み物を口にする。それには薬が混入してあり、彼女は "Ah! the sedative had been administered. In fact, they had given me a strong opiate. I was to be held quiet for one night." (p. 539) と勘付く。だが、鎮静剤が盛ってあるにもかかわらず、眠くなるのではなく、むしろ "Instead of stupor, came excitement" と、興奮し、想像力が高まる。「想像力」に、夜の街の様子も知らなければならぬと促がされて、ルーシーは夜の道を一人でどこともなく進んで行く。足は Haute-Ville の方に向いていた。さらに歩いて行くと、音楽が聞こえ、美しく着飾った淑女達が大量歩いているのに気づ

く。殉教者や愛国者達の霊を祝う祭りであったのだ。野外コンサートが開かれていたので、腰を下し、耳を澄ましていると、ポールと性質が似たある店の主人が寄って来て、プレトン家の親子やポーリーナ親子が集っている場所の近くにルーシーを案内する。ルーシーは、彼らには気付かれぬようにしながら、彼らの話し声に耳を澄ますのであった。

『教授』の場合、プロテスタントの墓地での遁走の場面は主人公ウィリアムの都合の良い方向へと推移していくのであるが、『ヴィレット』では15章でも、この38章でも、反対に悪い方へと向う。ここが二作品の決定的な相違点である。

ルーシーは一団の中にベック夫人の他にウォルレイヴンズ (Madame Walravens) 夫人やシラ牧師 (Père Silas) の姿を見、

The sight of them thus assembled did me good. I cannot say that I felt weak before them, or abashed, or dismayed. They outnumbered me, and I was worsted and under their feet; but, as yet, I was not dead. (p. 552)

と感ずるのであった。このシーンは次の39章に続き、一息か、または一にらみで人を殺したとされる伝説上の怪蛇バジリスクに見つめられたかのように、ルーシーはその場を脱れたくとも脱れられない (p. 553)。

彼らを木陰に隠れて観察しているうちに、ポールが同席しているのに気付く。そのために

I felt very glad now that the drug administered in the sweet draught had filled me with a possession which made bed and chamber intolerable. (p. 558)

と、鎮静剤が混入されたのに感謝する。だが、これをして『教授』と同一の方向に向かって見ると見てはならない。それは以下の二点から容易に窺えよう。まず第一として、最初予定していた 'Antigua' 号による出帆を見合わせ、現時点ではまだイギリスを離れていないものの、二週間後には 'Paul et Virginie' 号で出発する予定であり、ポールとルーシーの別離は決定的であったからである。第二に、ルーシーはポールを一方的に知るだけで、ポールは彼女の存在に気付かないからである。いや、

He could not see my face, I held it down; surely, he *could* not recognise me: I stooped, I turned, I *would* not be known. (p. 548)

から知れるように、ルーシーの方で意識的に顔を隠そうとしているのではあるが、とにかく『教授』で見られた恋人同士の相互交流は行なわれない。ルーシーは、一方的にポールの姿を木陰から見、彼の元氣な姿を目のあたりにして、安堵の胸をなでおろすのであった。それから、

I turned from the group of trees and the 'merrie companie' in its shade. Midnight was long past; the concert was over, the crowds were thinning. I followed the ebb.

Leaving the radiant park and well-lit Haute-Ville... I sought the dim lower quarter.
(p. 562)

と、その場を密かに去るのである。以上から、ここのシーンは正しく『教授』とは正反対になっていると言えよう。

『教授』では迫害の次には、第五としてウィリアムとフランシスの結婚後における繁栄が、第六として、イギリスへの帰国が描かれ、ウィリアムとフランシスは一子をもうけ、安定した生活を送っているようになっている。それに反し、『ヴィレット』では、ルーシーとポールの三年間に亘る別離が描かれ、ポールが三年後の十一月にイギリスへ帰国するという段になると、突然暴風雨が起り、乗船していた 'Paul et Virginie' 号は難波したように描かれている⁷。シャーロットは父パトリック・ブロンテ (Patrick Brontë) の強いての勧めにより、ポールの生死については "Trouble no quiet, kind heart; leave sunny imaginations hope" (p. 593) と曖昧にしてはいるものの、ポールが海の藻屑となってしまったことは疑いを入れないであろう。どう欲目に見ても、彼らが手に手を携えて幸福に生きて行く図ではない。要するに、『ヴィレット』では『教授』の繁栄を記した第五の場面はほとんど描かれていないし、第六の部分に至っては、エクソダスが否定されているのである。

IV

以上、『教授』と『ヴィレット』を対比させ、両者の類似点、相似点を考察してきた。両者には、ゆるやかな対応関係があり、登場人物の性別や名前を除けば、似たりよったりの物語であると、表面的には言えるであろう。特に、ハンズデン (Hunsden) に言わせてはいるが、『教授』の最後の

'your brother Ned is getting richer than Croesus by railway speculations; they call him in the Piece Hall a stag of ten; and I have heard from Brown, M. and Madame Vandenhuten and Jean Baptiste talk of coming to see you next month. He mentions the Pelets too; he says their domestic harmony is not the finest in the world, but in business they are doing "on ne peut mieux."'" (p. 272)

と『ヴィレット』の

Madame Beck prospered all the days of her life; so did Père Silas; Madame Walravens fulfilled her ninetieth year before she died. (p. 594)

は共に、主人公達と敵対関係にあった者か、あるいは、それに近い者達が、盛えていることを述べており、両者の類似性を印象づける結末となっている。

しかしながら、ある程度の対応関係が『教授』と『ヴィレット』に見られるとは言いが

ら、第三段階の遁走の場面で以降は、かなりの相違点を見せてきた。『教授』の方は、身寄りのない、寂しい境遇から順々に抜け出し、終には結婚し、子供までもうけるという、例えて言えばハッピー・エンドの文学であるのに対し、『ヴィレット』の方は、孤児である点では『教授』の出だしと同じであるが、しかし名付け親に大事にされている恵まれた環境から出発し、次第に人生の坂道を転げ落ち、結果的には、ルーシーにとっての幸福な時期は、インドに行った恋人を待っていた三年間だけであり、その後は海に沈んだと思われる恋人の面影だけを頼りに生きている、孤独な女を描いた⁸悲劇の文学である。

『ヴィレット』は『教授』に似ているように表面上は見える。しかし、似ている点を強調すると同時に、今までの考察から明らかになってきたと思われるが、異っている点にも目を向けるべきではないか。『ヴィレット』が『教授』と大まかな骨組みでは似ていると言っても、細部においては、モチーフの繰り返しがあるし、結論に至っては逆になっているのである。『教授』が成功譚と言い得るならば、『ヴィレット』は正しくその正反対のものであろう。あえて言うならば、『ヴィレット』は『教授』の、形態は同じでも明暗が逆になっている陰画である。この観点から考えてみると、『ヴィレット』は『教授』の似而非なるリハーサルと言えよう。

最後に一つの問が湧き上がってくる。『教授』が「出エジプト記」に倣っているのであれば、『ヴィレット』は何に倣っているのか、という問である。私は聖パウロに注目したいと思っているのであるが⁹、それについては後日に稿を改めたい。

Notes

1. See Margaret Lane, "Introduction," *The Professor and Emma* (Everyman's Library, 1975), p. vii.
2. 拙稿「出ブラッセル記 —— *The Professor* の一考察」、『試論』第19集 (1980), pp. 35-51
3. E. D. H. Johnson は四つに分けている。
See "‘Daring the Dread Glance,’ Charlotte Brontë's Treatment of the Supernatural in *Villette*," *NCF* XX (1966), p. 326.
4. Robert A. Colby はこの問題に関し, "The Germ of *Villette* is contained not in what Miss Brontë tried and failed to do in *The Professor*, but in what she deliberately tried not to do there," "*Villette* and the Life of the Mind," *PMLA* LXXV (Sept., 1960), p. 411. と言っている。
5. *Villette*, The Haworth Edition (1900; rpt. New York: AMS, 1973), p. 1. なお *Villette* と *The Professor* の引用は、この Haworth Edition による。
6. Penguin 版によると、プレトン夫人の世話になる第16章は、第2巻の第1章にあたる。従って1, 2巻の共に最初の章でプレトン夫人の世話になっていることになる。See *Villette* (Penguin, 1979). フライの『批評の解剖』における四季説を換起させる。
7. *Villette* と Bernardin de Saint-Pierre の作品 *Paul et Virginie* の関係については、John H. Ware, "Bernardin de Saint-Pierre and Charlotte Brontë," *MLN* XL (June, 1928) を参照。
8. Cf., "The true subject of *Villette* is in any case not love but loneliness," Winifred Gérin, *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1967),

p. 495.

9. 主人公 Paul, John と結婚した Paulina, それに, Paul が乗船し, 沈没した船が 'Paul et Virginie' というように, 固有名詞 Paul の多用, さらに全編に満ちている暴風雨のイメージなどは, 聖パウロとの関連を示唆するのではないだろうか。